

# 胞衣を祀る神社

## ～宮崎八幡宮の事例を中心に～

福 西 大 輔

### はじめに

日本各地には胞衣を祀る神社がある。胞衣を祀る神社とは、胞衣をご神体として祀る、あるいは祭神とは別に神社の境内に胞衣を祀っている神社とする。具体的にいえば、前者は神奈川県的身代不動内にあった胞衣神社のように胞衣を埋めたところ（胞衣塚）が神社になったものである。後者は東京都の根津神社に埋められている徳川家宣の胞衣や京都府の春日大社に埋められている仁孝天皇の胞衣のように神社がもともとあり、その境内に胞衣を埋めて祀っているものである。

こうした習俗がいかにして成立したのか、その背景を考え、特に「胞衣祭り」を行っている福岡県福岡市東区箱崎の宮崎八幡宮を通して、胞衣と八幡信仰の関係を中心にみていきたい。その際、胞衣を祀ってきた祭祀者に注目する。

### 1. 胞衣と神社

胞衣は胎児を包んでいる胎盤のことで、後産ともいわれる。これが出て分娩が終わる。

その胞衣は、一般的に民俗社会において人々には特別なもの、呪術的存在だと考えられていた\*<sup>1</sup>。胞衣は家の床下や玄関の敷居の下、墓地、あるいは患方を選んで埋めなければならないという話が伝わっている。これらの埋める場所は、人が普段踏まないところ、逆に多くの人が踏むようなところでなければならないという決まりに基づいている。

また、胞衣の持ち主は胞衣の上を最初に通ったもの、例えば、蛇や犬などが胞衣を埋めた上を通ると、胞衣の持ち主がその動物を一生怖れるという伝承もある。そのため、父親が一番はじめに威厳を保つために踏まなければならないという話も伝わっている。

その一方、胞衣は出血とともに女性から出るために「血盆経」などの影響で穢れたものだと考えられている。また、山本ひろ子によれば、室町時代に成立した『荒神講式』に胞衣を荒神として信仰していた記述があるという\*<sup>2</sup>。

こうしたことをふまえ、各地の胞衣を祀る神社を見ていきたい。

表「神社と胞衣」は、日本各地にある胞衣を祀る神社の事例をまとめたものである。事例が少なく、さらなる調査研究の必要性があるが、概要をつかむ参考にはなる。表からは胞衣を祀る神社は、安産祈願や子育て祈願などの産育祈願の信仰の対象となっていることがわかる。例えば、千葉県一宮町枇杷畑の胞衣神大明神や岐阜県高山市江名子町の荏名神社では、安産祈願の対象となっている。千葉県一宮町枇杷畑の集落では、女性の集まりや子安講などには胞衣神大明神と唱えてから産育祈願に関する行事を行っていったという。また、島根県大社町の胞衣神社では乳受けの祈願対象になっている。

これらの胞衣を祀る神社で埋められる胞衣は大きく3種類に分けられ、1つは地域の人々の胞衣を共同で埋めたもので、神奈川県川崎市身代不動内の胞衣神社のように付近の産婦たちが胞衣を持って来て埋めたものである。もう1つは天皇などの高貴な身分の者たちのもので、京都府東山区五条橋の若宮八幡宮のように孝明天皇の胞衣を埋めたものである。

そして、3つ目のものが神の胞衣である。岐阜県中津川市にある恵那神社では、天照大神の胞衣が埋められているといわれている。

この3種類に分類しきれないものとして八幡神の胞衣がある。八幡神の胞衣は、天照大神の胞衣のような神の胞衣と、天皇などの高貴な身分の人々の胞衣との中間に位置するものだと考えられる。八幡神は応神天皇と同一視されているからである<sup>\*3</sup>。もともと八幡神と応神天皇の霊は別の存在として考えられていた。だが、古代の或る時期以降、八幡神=応神天皇という構図ができたとされている。

八幡神の胞衣は和歌山県の衣奈八幡神社や福岡県の筥崎八幡宮に埋められたという伝承がある。筥崎八幡宮では「胞衣祭り」という胞衣にちなんだ祭りもなされている。

こうした胞衣を祀る神社が生まれた要因の1つとしては、子の胞衣を父親が威厳を保つために一番はじめに踏むと良い、あるいは胞衣の上を一番はじめに通ったものをその胞衣の持ち主が生涯恐れるようになるなどの事例があるように、胞衣の扱いがその持ち主である子に大きな影響をあたえるという伝承があると思われる。この伝承に基づいて考えると、国を司る天皇などの胞衣は、国の安泰を考える上でも大切に扱う必要が生まれ、胞衣を祀る神社が成立したのだと考えられる。神の胞衣となればなおさら重要となる。

しかし、そこには出産の穢れを嫌うという、神道などにおける穢れの考えと矛盾するものが生まれてしまう。そのため、出産の穢れを嫌う神職やそれに準ずる聖職者たちが、直接、胞衣を祀ってきたとは考えにくい。そこで、こうした神社に胞衣を祀った人々はいかなる人たちであったのか、次に考えていきたい。

## 2. 胞衣と河原者

### ① 胞衣をめぐる人々

神社に胞衣を祀っていた人々はいかなる人たちなのかを考える上で興味深い研究がある。河原者のような清めの役割を担ってきた人々と産育儀礼との繋がりがあったことが論じられている<sup>\*4</sup>。

保立道久は中世の皇族や貴族の出産の際には山伏や陰陽師たちが関わり、横井清などは胞衣を埋める際に河原者たちが関わっていたことを指摘している<sup>\*5</sup>。

北野晃や大本憲夫は「蟹守(掃守)」といわれる平安時代の清めの職と「蟹守」という産育に関わる習俗との関連を言及している<sup>\*6</sup>。平安時代には、宮中の儀式の場を設営し掃き清めていた蟹守(掃守)という職があった。そして、鹿児島県奄美大島や沖縄諸島では、蟹守という出生七日目の赤子が産室からの初めての外出の際に赤子の額や身体の上をはわせて、赤子の成長と出産の穢れを払うという意味合いのある習俗が残っている。この習俗と平安時代の職掌の名称が「蟹守(掃守)」であり、『古語拾遺』には「帚を作り蟹を掃ふ」とあることから、両者には関連があったのではないかと推測している。

中村禎里は、平安初期には皇族・貴族は中国の影響を受け、土中に胞衣を埋める方法であったが次第に影響が弱くなり、胞衣を高所に置いたり、吊るしたりする日本独自の方法もうまれていったので

はないかと述べている<sup>\*7</sup>。その上で、中世末期から近世初期にかけての権力者の胞衣納法は、伊勢流・小笠原流などの伝書が伝わっており、それらによれば、高位のものたちは、家や山の高所に安置し、それ以外の人たちは敷地内に埋めていたという。そして、近世初期になると天皇家の胞衣は吉田山に埋められるようになったと考えている。この吉田山は1484年に吉田兼俱が全国の神を合祀し、吉田神道をはじめたところでもあった。このあたりに神道と胞衣の関わり起源がみられるのではなかろうか。

また、神功皇后が応神天皇を出産する時に協力したことを自分たちの仕事のはじまりとして説いた文書をもっていた河原者もいた。

## ② 『八幡重来授与記』(京都千本)

石清水八幡宮の周辺にいた河原者たちは神功皇后が応神天皇を出産する時に協力したことを誇りにし、そのことを記した文書を持っていた。彼らが持っていた文書は『八幡重来授与記』(京都千本)と呼ばれるもので、いわゆる『河原巻物』の1つである。その一部を紹介すると以下のようになっている。

一人皇拾五世神功后三漢退治之時、博伽多之河原にて若宮誕生、旃陀共集り牛能皮越以四面に張、防風近避之森之中神木剪り、以炎焰涌湯令洗淨、依之 皇帝安陰、若宮砂 中講飯朝時至心身堅固、人皇拾六世應神帝旃陀共召 勅許有之定目、許容之伽條々

これは、神功皇后の出産の手伝いをした功績により牛の皮の使用権利を得たということを主張するもので、河原者と神功皇后の出産の伝承を結びつける史料である。『八幡重来授与記』は京都千本以外にも盛田本、河内本、北条本などがある。これら『八幡重来授与記』は17・18世紀のころ、石清水八幡宮に近いところで作成されたと脇田修は考えている<sup>\*8</sup>。

『八幡重来授与記』には、神功皇后の出産場所は「博伽多之河原」と記載され、宮崎八幡宮のことだと考えられる。宮崎八幡宮は文治元年(1185)に石清水八幡宮の別宮に位置付けられている。

そこで、宮崎八幡宮のことを少し考えてみたい。

## 3. 宮崎八幡宮

### ① 宮崎八幡宮の概要

宮崎八幡宮は宮崎宮とも称し、福岡県福岡市箱崎町にあり、式内社で、筑前国一之宮、旧官幣大社であった(写真1)。祭神は応神天皇・神功皇后・玉依姫命である。天平宝字3年(759)創建説があるが、現在は、延長元年(923)筑前穂波郡の大分宮から移転されたと考えられている。延喜20年(921)、託宣が下り、大分宮では三悪があるため、頓宮のあった宮崎(箱崎)に新宮が営まれたという。ちなみに三悪とは、まず、節会に参来する府官人が行路にある伯母竈門宮に不敬である。ついで、陰阻な山越えのため、饗応の郡司百姓が苦しんでいることであり、そして、放生会は海上で行われるべきで山間の大分宮では不相当であるという。

この宮崎八幡宮境内には幾つかの末社がある。東には池島殿・武内社・乙子殿・住吉殿・稲荷社、西には龍王社・若宮殿・仲哀殿・殿島殿・民潤社がある。そして、応神天皇の御胞衣を箱に入れて、

白砂青松の地に植え、松を植えたといわれる、その宮松があり、御神木となっている（写真2）。その松の前に「敵国降伏」という額がかかっている楼門、そして拝殿・本殿がある。

宮松については、宮崎八幡宮に関する縁起では以下のように記されている。宮崎八幡宮に関する縁起は、石清水文書の中に『宮崎宮縁起』と『宮崎宮紀（記）』がある。『宮崎宮縁起』には「以神亀三年乙丑、造穂浪宮云々 延長元年癸未造立宮崎宮、依託宣、自穂浪宮遷此宮 延喜廿一年六月廿一日、於観世音寺西大門、若宮一御子、七歳女子橘滋子仁就御志天、去地七尺上天託宣曰、（中略）欲移住宮崎松原、有其故、昔我天下国土乎鎮護世利時、戒定恵宮、彼松原地所埋置也、仍其名乎宮崎号奈利、（以下略）」とある。

また、（大江）匡房作とされる『宮崎宮紀（記）』には「宮崎宮在西海道筑前国那珂郡、蓋八幡大菩薩之別宮也、伝聞、理（埋）戒定慧之三篋、故謂之宮崎、其処之為躰也（以下略）」とある。このように『宮崎宮縁起』によれば、宮松の下には戒定恵の篋が埋まっており、八幡神（応神天皇）の胞衣が埋まっているとは書かれていない。『宮崎宮紀』にも同様に埋まっているのは戒定恵之三篋であるとされている。ちなみに戒定慧とは、仏教の修業の3つの方法で戒律と禪定と智慧のことだという。

この宮崎八幡宮では数々の行事がなされている。1月1日に三元祭、1月3日は玉取祭、2月11日は建国記念祭、2月17日は祈年祭、春季社日祭、5月27・28日はさつき大祭、6月第4日曜日に池島殿祭、7月最終土日曜日に夏越祭、七夕祭は8月7日、9月12日から18日までは放生会大祭、秋季社日祭、11月23日は新嘗祭、12月14日は御降誕祭、12月31日は御胞衣祭がなされる。その中でも有名な祭りは「玉せせり（玉取祭）」と「放生会」である。

まず、玉取祭は1月3日に行われ、約500年前にはじまったとされている。陰陽2つの玉のうち陽玉にふれて頭上にかざすと幸運を授かるとされ、約250人の男たちが勢い水を浴びて玉を奪い合う祭りである。

玉取祭は午後の1時より始まる。まず、絵馬殿で玉洗いの儀式があり、神官が陰陽2つの玉を洗い清めて、しらしめ油をたっぷりとそそぎ、250m離れた末社の玉取恵比寿神社に運び、神事のあと、そこから子供達が競り合いながら玉を運ぶ、そして途中から大人の男衆に代わり、一の鳥居をくぐりオイサー、オイサーと声をあげ、たちまち激しい争奪戦になる。途中、玉は高くかざされ、玉をかざしたものは家門繁栄といわれている。

玉は最後には楼門で待ち受ける神職に手渡る。男衆は陸組（おかぐみ）と浜組（はまぐみ）に分かれており、神職に最後に渡したのが陸組であれば豊作、浜組であれば大漁といわれている。

この祭りと同様ににぎわう祭りとして他の八幡宮同様に放生会があり、9月12日から18日まで行われる。12日には18時より御神輿行列（お下り）といわれる行列がでる。13日には大道芸大会が絵馬殿前で13時からなされ、14日には、博多文化人連盟による幕出しがなされる。幕出しとは、浜にある松の木の枝を利用して大きな幕で囲み、その中で大宴会することで、昭和5年ごろまでは盛んにやっていたが、景気が悪くなったことと、松喰い虫で松が倒れていったことなどが重なり、幕出しをする人が少なくなり、今の形になった。その日の19時には御神輿行列（お上り）がなされる。そして、15日には放生会の大祭が10時からなされ、その晩には筑前博多ごま奉納が19時30分からなされ、20時30分には博多金獅子太鼓奉納がされる。16日は石見神楽奉納が19時からなされる。18日には放生神事と稚児行列が14時ごろからなされてお祭りが終わる。

この宮崎八幡宮を代表する2つの祭りには産育祈願に関わる八幡信仰としての側面は見当たらない。

だが、これらの祭りに比べると派手さはないが産育と関わりのある祭りとして宮崎八幡宮では胞衣祭り・三元祭がなされている。

## ② 宮崎八幡宮の胞衣祭・三元祭

この宮崎八幡宮の胞衣祭・三元祭を西角井正慶編の『年中行事辞典』をもとに見てみたい<sup>\*9</sup>。

### 三元祭

(前略) 正月元日に行われる祭、年の始・月の始・日の始というところから三元と名付けたもので、この祭には、古風な搗杵で搗いたターラゴ餅と称する海鼠形の鏡餅を神供とする。そのいわれは、昔、応神天皇が十二月十四日に降誕され、御胞衣を大晦日に至って宮崎の地に納められた。その夜は、徹宵、埋蔵の儀に混雑を極めたため、鏡餅を搗くことができなかつたために神功皇后は宮崎浦の漁夫が献じた海鼠を餅の代わりに召し上がったという故事に基づくものだという。

大晦日には同社で胞衣祭という祭典があり、この祭の終了後、箱崎町の漁業者が裸体になって海水で身を浄め、そのまま神饌所に走り入り、ターラゴ餅を搗き、これを神饌とする。なお、大晦日の夜、社前の神木宮松（この下に御胞衣を埋めたという）の前に丸い金器に赤飯を盛って供える。これは、安産祈願のためという。(以下略)

ちなみに胞衣祭（御胞衣祭）が12月31日になされた理由としては、応神天皇の誕生は12月14日だが、御胞衣を宮崎の地に納めたのが12月31日だったからだといういわれが伝わっている。

御胞衣祭の式次第は、次のようになっている。12月31日午後9時からなされる。

一、修祓 一、開扉（奉楽） 一、献饌（奉楽） 一、祝詞奏上 一、玉串拝礼 一、撤饌（奉楽） 一、閉扉（奉楽） 一、退出 一、末社巡拝

次に 三元祭の式次第を見ると次のようになっている。1月1日の午後7時からなされる。

一、修祓 一、開扉（奉楽） 一、献饌（奉楽） 一、祝詞奏上 一、玉串拝礼 一、撤饌（奉楽） 一、閉扉（奉楽） 一、退出 一、末社巡拝

これらを見てわかるように胞衣祭りと三元祭も神職が行うこともほぼ同じであるが、大きな違いは『年中行事辞典』にあるように海鼠型の餅を三元祭の際に献饌されていることである。

佐々木哲哉がまとめた「神仏分離以前における宮崎宮年中諸祭一覧」によれば、三元祭は『宮崎亀鑑』の寛保3年（1096）に記載があり、この前後には成立していたことは確実である<sup>\*10</sup>。しかし、御胞衣祭りに関しては記載がない。こうしたことから八幡における胞衣信仰も中世末から近世にかけて成立したのではなかろうか。

一方、『改訂総合日本民俗語彙』によれば、福岡県博多地方では他所者のことをエナチガイと言い、胞衣を埋めた所がこの土地ではないという意味からきたと思われる言葉が伝わっており、胞衣への特別な思いがあった土地であることがわかる<sup>\*11</sup>。

また、先に述べたように宮崎八幡宮の八幡神（応神天皇）の胞衣が埋まっているという伝承のある場所には宮松があり、信仰の対象となっている。そして、箱崎の住人は古例として門松すら立てなかったといわれている。これらのことは、先の横井清が境界上にある胞衣塚の上に松を植える習慣があったと指摘していることと合わせて考えると興味深い。

その上、先にもふれたように八幡の胞衣を聖視するのは宮崎八幡宮だけではない。和歌山県日高郡由良町衣奈にある衣奈八幡神社でも応神天皇の胞衣が埋められているといわれ信仰されている。

これまでみてきた宮崎八幡宮では、神功皇后が応神天皇を出産したということが重要視され、そのことを背景にして産育に関わる祈願の信仰が生まれていることが祭礼などを見てきてわかった。石清水八幡宮でも秘祭として応神天皇の誕生を祝う祭りがなされ、宇佐神宮でも小規模ながらなされている。広く各地の八幡宮でも産育祈願がなされていることは、拙稿「産育祈願に関わる八幡の信仰～宇美八幡宮の事例を中心に～」で指摘を行った<sup>12</sup>。

また、石清水八幡宮には犬神人とよばれる神仏の直属民がいて、清めの役割を担ってきたことが網野善彦などの研究によってわかってきている。犬神人は鶴岡八幡宮にもいたことが知られている<sup>13</sup>。

## 結びにかえて

胞衣を祀る神社があるということは、出産に様々な神社関係者が関わっていたことを裏付けるものであった。中村禎里の考えをふまえれば、吉田神道の影響を受け、胞衣を祀る神社が中世末期から近世初期に生まれ、それが広がっていった可能性が高い。それは胞衣の始末を担ってきた人々が神社等にもいた可能性を示唆するものでもあった。神社は不浄なものとして出産やそれに関与するものを嫌ってきたといわれているが、これまで見てきたように時代や神社によっては出産や胞衣などの不浄とされたものも受け入れてきたことがわかった。

特に八幡信仰において、神功皇后が応神天皇を出産した日は宮崎八幡宮のように祭りの日とされている例もあった。八幡神の出産譚は広がりを持ち、石清水八幡宮やその周辺にいる河原者のような清めの役割を担う人々の関与も考えられる。彼らは胞衣の始末や安産祈願などを通して、人々の産育に関わる中で神功皇后の出産伝承や御利益を広め、八幡信仰の拡大に寄与していったのではないかと推測できた。そして、産育に関わる八幡信仰は八幡神の胞衣などが、信仰の一部を担っていることがわかった。

八幡神は胞衣の存在によって、人と同じように出産で生まれたということになり、人により近い存在として、石清水八幡宮などで清めの役割を担った人々によって位置づけられていった。その結果、八幡神と応神天皇は別の存在であったものが、或る時期に八幡神が応神天皇と同一視がされる原因の一つになったのではなからうか。あるいは逆に八幡神と応神天皇が同一視されることによって、八幡神が人に近づくことになり、八幡神の胞衣という存在が生まれたとも考えることができる。

こうしたことが八幡信仰の中に平景清が祀られる生目神社のような人を神に祀る習俗の起源を生み出す一つの要因になったとも著者は考えている。すなわち、出産という行為を通して、人に近い存在になった八幡神に人が近づくことができると考えた結果が、人を神に祀る習俗の起源の一つになったと思われる。その証拠に人を神に祀る習俗と若宮八幡・新八幡といった八幡信仰が結びついている事例は多くみられる<sup>14</sup>。

なお、本論では神社などの清めを担ってきた河原者・犬神人・散所などの役割や時代的な差異を敲

密に押さえきれていないので、今後改めて検討したい。

註

- 1 新谷尚紀 1995『死と人生の民俗学』 曜曜出版 p77～78
- 2 山本ひろ子 1998『異神 - 中世日本の秘教的世界-』 平凡社
- 3 飯沼賢治 2004『八幡神とは何か』 角川選書 p125～128  
八幡神=応神天皇という構造が成立した時期に関しては諸説あり、6世紀末に大和天神氏によって八幡信仰の中に応神天皇の霊の考えが持ち込まれた、あるいは8世紀後半になって成立したなどの説がある。飯沼などは9世紀以降に八幡神=応神天皇が成立したと考えている。
- 4 河原者に関しては多様な議論があるが、ここでは「河原人」「河原乞食」あるいは「穢多」や「清目」などとも呼ばれ、中世期から近世初期において、死んだ牛馬の処理や造園などに関わった被差別民をさし、河原者という言葉を広義の意味で使用する。
- 5 横井清 1998『平凡社ライブラリー 233 的と胞衣 中世人の生と死』 平凡社 p47～p64、保立道久 1986年『中世の愛と従属 絵巻の中の肉体』 平凡社 p182～p216
- 6 北野見「蟹守と箒神—産育習俗と蟹—」『西郊民俗』179や大本憲夫「蟹守」『日本民俗学大辞典』がある。
- 7 中村禎里 1999『胞衣の生命』 海鳴社
- 8 脇田修 1991『河原巻物の世界』 東京大学出版会 p73
- 9 西角井正慶編 1958『三元祭』『年中行事辞典』 東京堂出版 p347～p348
- 10 佐々木哲哉 1986『別表 神仏分離以前における宮崎宮年中諸祭一覧』『福岡市立歴史資料館研究報告書 第10集』 福岡市立歴史資料館 p4～p5  
宮崎宮伶人座 1973『宮崎宮伶人座 箱崎組の歩み』 宮崎宮伶人座 p14
- 11 柳田國男 監修、民俗学研究所 編 1955『改訂総合日本民俗語彙』第1巻 平凡社 p185
- 12 福西大輔 2008『産育祈願に関わる八幡の信仰～宇美八幡宮の事例を中心に～』『熊本大学 社会文化研究 6』 熊本大学大学院社会文化科学研究科
- 13 網野善彦 2005『中世の非人と遊女』 講談社 p94
- 14 柳田國男 1952『人を神に祀る風習』（『柳田國男全集』13 1990 ちくま文庫）p648  
柳田は「人を神に祭る風習は、八幡に起因すと認めがたきはもちろん、後代その風習の中堅をなしたのが、八幡であったとも自分は考えておらぬ」といった上で、八幡に祀られる人を神に祀る習俗を多く取り上げている。

参考文献

- \* 網野善彦 2005『中世の非人と遊女』 講談社
- \* 飯沼賢治 2004『八幡神とは何か』 角川選書
- \* 大本憲夫 1999『蟹守』『日本民俗学大辞典』 吉川弘文館
- \* 大島建彦・崗田 稔・圭室文雄・山本 節編 2001『日本の神仏の辞典』 大修館書店
- \* 川口 謙二 1993『日本神祇由来事典』 柏書房
- \* 北野見 2002『蟹守と箒神—産育習俗と蟹—』『西郊民俗』179 西郊民俗談話会
- \* 佐々木哲哉 1986『別表 神仏分離以前における宮崎宮年中諸祭一覧』『福岡市立歴史資料館研究報告書 第10集』 福岡市立歴史資料館
- \* 佐藤千春 1997『お産の民俗 特にその俗信集』 日本図書刊行会

- \*新谷尚紀 1995『死と人生の民俗学』曜曜出版
- \*丹生谷哲一 1994『岩波講座 日本通史 第8巻 中世2 非人・河原者・散所』岩波書店
- \*中村禎里 1999『胞衣の生命』海鳴社
- \*西角井正慶編 1958『年中行事辞典』東京堂出版
- \*筥崎宮伶人座 1973『筥崎宮伶人座 箱崎組の歩み』
- \*萩原秀三郎 1995『日本の祭 ポケット図鑑』主婦の友社
- \*福田アジオ・新谷尚紀・他 1999、2000『日本民俗大辞典(上・下)』吉川弘文館
- \*福西大輔 2008「産育祈願に関わる八幡の信仰～宇美八幡宮の事例を中心に～」『熊本大学 社会文化研究 6』熊本大学大学院社会文化科学研究科
- \*保立道久 1986『中世の愛と従属 絵巻の中の肉体』平凡社
- \*村田正志 1998『筥崎宮一由緒と宝物』筥崎宮
- \*柳田國男 1952「人を神に祀る風習」(『柳田國男全集』13 1990 ちくま文庫)
- \*柳田國男監修 民俗学研究所編 1955『改訂総合日本民俗語彙』第1巻 平凡社
- \*山本ひろ子 1998『異神 - 中世日本の秘教的世界』平凡社
- \*横井清 1998『平凡社ライブラリー 233 的と胞衣 中世人の生と死』平凡社
- \*盛田嘉徳 1974『中世賤民と雑芸能の研究』雄山閣出版
- \*脇田修 1991『河原巻物の世界』東京大学出版会

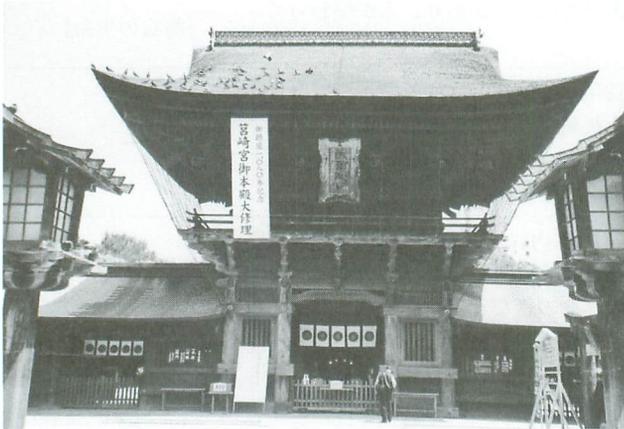
(表) 神社と胞衣

	場所・神社名	内 容	参考文献
1	栃木県鹿沼市奈佐原町 胞衣神社	出産した後産や流産児などを埋めて、産子の成長を祈ったり、死児の冥福を祈った。	—
2	栃木県鹿沼市塩山町 胞衣神社	塩山の総代会が大正4年5月に胞衣神社を祀る事を決議し、墓地の一角に祠を建立した。胎盤などの後産を供養する祠に向かって男児なら左手、女児なら右手に和紙に包んだ胞衣を境内地に埋めて、その上に父親の名を書いた胞衣札を差して、子の健康を祈願した。	—
3	千葉県一宮町枇杷畑 胞衣神大明神	石祠があり、安産・子育ての神として信仰をあつめてきた。集落の女性の集まりや子安講などには、胞衣神大明神と唱えてから行事をおこなっていったという。	『日本の神仏の辞典』
4	東京都文京区根津 根津神社	徳川家宣の胞衣塚が神社境内西側にある。	『胞衣の生命』
5	神奈川県川崎市高津区下作延身代 不動内 胞衣神社	昭和20年8月の終戦以前までは付近の産婦たちが胞衣を持って来て、社の下に埋めたものである。しかし、現在では、この社の存在も参拝人もいなくなってしまった。	『日本神祇由来事典』
6	愛知県岡崎市康生町 龍城神社	龍城神社境内には東照公(徳川家康)の胞衣塚がある。	—

	場所・神社名	内 容	参考文献
7	岐阜県中津川市 恵那神社	恵那神社には、神代のころ、伊邪那岐・伊邪那美の大神から生まれた天照大神の胞衣を洗い清めてこの地に納めたといわれている。	『日本の神仏の辞典』
8	岐阜県高山市江名子町 荏名神社	「荏名（えな）」が「胞衣（えな）」と解釈され、安産の神として信仰されている。	『日本の神仏の辞典』
9	新潟県柏崎市大字上輪 胞姫神社	文治年間、源義経が兄頼朝の追討を逃れ、藤原秀衡を頼って奥州の地を目指す折、亀割坂にさしかかるや随従するその妾が産気を催し、甚だ苦しみはじめた。武藏坊弁慶が当社社前にて、ひたすら祈願した処、さしもの苦痛もたちまちやわらぎ、めでたく安産を遂げたので主従手を取り合って大いに喜んだ。境内に誕生した若君の胞衣を納め、「靈験あらたかな安産守護神よ」と奉賽感謝して立ち去ったと伝えられている。	『日本の神仏の辞典』
10	和歌山県日高郡由良町衣奈 衣奈八幡神社	応神天皇の胞衣が埋められている神社として信仰されている。	『日本神祇由来事典』
11	京都府右京区西院 春日大社	仁孝天皇の胞衣を埋め、木を植える。安産・子授け・乳幼児健康祈願の対象になっている。	『胞衣の生命』
12	京都府東山区五条橋 若宮八幡宮	孝明天皇の胞衣塚があり、木が植わっている。	『胞衣の生命』
13	京都府東山区 粟田神社	貞観18年（876年）、清和天皇が国家と民の安全を祈願されたのが始まりだといわれ神社の一角に、光格天皇の御胞衣も祀られ安産や子育てを祈願されている。	—
14	京都府 吉祥院天満宮	天満宮の境内にある胞衣塚は当宮御祭神・菅原道真公（845～903）が此地で生まれた時のへその緒などが納められている。そこは中心にへそを象徴した丸い石が据えられている。6月25日の菅公御誕辰祭には安産御祈禱をしている。初宮詣りには、本殿参拝後此塚の前にて小児の鼻をつまみ元気な声を上げさせ無事成長を祈るといふ。此塚の玉石を喰い初め石としてお宮参りで授与しており百日あるいは百二十日で祝う喰い初めの儀において軽く小児の口に添えると丈夫な歯が生えるとされている。	—
15	京都府下京区仏光寺通猪熊西入西田町 天道神社	天道神社の境内に明治天皇皇后（昭憲皇太后）御胞衣埋納所がある。	—

	場所・神社名	内 容	参考文献
16	大阪府天王寺区小橋町 産湯稲荷神社	産湯稲荷神社から東へ800メートルほどの東成区玉津3丁目の交差点に、大小橋命(神功皇后の近臣・雷大臣の子であり、藤原鎌足は大小橋命の十三代のちの子孫であるという)の胞衣塚が祀られている。	—
17	大阪府 玉造神社	豊臣秀頼の胞衣塚を胞衣塚大明神として祀っている。豊臣秀頼の胞衣塚は、彼が生まれた大阪城の真南、現在の大阪市中央区上町一丁目にあったと伝えられる。そのうち現在の同区玉造二丁目玉造稲荷神社境内に移された。その時に社が造られたようである。	『お産の民俗』
18	島根県大社町 胞衣神社	国造家の人たちの胞衣を祀ったといわれる神社で、乳授けの信仰があった。	『日本の神仏の辞典』
19	福岡市東区箱崎一丁目 筥崎宮	筥崎宮の境内にある筥松は、神功皇后が三韓征伐から帰国し、宇美の地で応神天皇を産んだ際、その御胞衣を箱に入れて白砂青松の場所に埋め、その印に植えたものだといわれている。	『年中行事辞典』

※参考文献がないものは、著者による現地調査・聞き取り等



(写真1) 筥崎宮 (筥崎八幡宮)



(写真2) 筥松

## The Shinto Shrine is dedicated to The Placenta — The Story Centers round Hakosaki Hachiman Shrine —

Fukunishi Daisuke

There is a Shinto shrine to enshrine a placenta in Japan. With the Shinto shrine to enshrine a placenta, I do it with a Shinto shrine worshiping a placenta in a Shinto shrine and the precincts to enshrine a placenta as God. I want to think about how such a Shinto shrine was formed.

Such a Shinto shrine was affected by the Yoshida Shinto and was formed in the early modern times from an end in the middle ages. It was the thing which suggested the possibility that there were the people who took the disposal of the placenta in a Shinto shrine.

In Hachiman faith, I was considered in particular to be the day of the festival on a birthday. The story of the birthday of Hachiman god had an expanse, and the participation of the people whom there was around Iwashimizu Hachiman shrine was thought about. And I understood that a placenta of Hachiman god took a part of the faith.